

東日本視察交流記（13） 被災地・仙台市若林区へ

6月14日（火） （その1）

朝、少し時間があったので、吉野作造記念館を訪れた。「古川学人」を名乗るように古川で生まれ育った吉野は、戦前の天皇制の時代のなか、民主主義（= democracy）を唱えて、大正デモクラシーをおし進め、さらには無産者運動に加わり、新人会の結成を呼びかけた。大きな歴史的役割を果たした吉野をわかりやすく紹介する展示、映像であった。NPO が運営している。

11 時頃、佐々木さんと仙台に向かった。途中、古川商工会議所、NPO 法人環境会議所東北に立ち寄る。

お昼、仙台市内で名物の牛タンと麦入りご飯をしっかりと食べた。



午後、車で若林区に入っていくと、津波がきたところとそうでないところがはっきりと区別できる。写真はいずれも津波被害があったところであるが、がれきがかなり除去された後である。

しかし、漁船は道端に残されたままであり、耕地には水が残っている。地盤沈下のせいであろうか。



若林区には佐々木さんの妻君のご両親が住んでおられる。幸い津波が来なかった場所だった。そこにお伺いして、知り合いの被災農家の奥さん S さんに来ていただき、話を聞くことになった。

S さんの被災状況は、『河北新報』（県下最大の新聞）に載った夫君（67 歳）の体験記「7 時間電柱にしがみつき」に生々しく描かれている。



「地震の時はテレビを見ていました。近所にいる叔母の様子を見に行き、会えずに戻ると、妻が『津波が来る』と叫びました。家の外に出て、バス通りを 2 人で走ると、下が黒く、上から白いしぶきをあげた津波が来るのが見えました。／妻は何とか民家の 2 階に上げてもらうことができましたが、私は足がついていかず、津波に追いつ

かれてしまいました。思わず近くにあった電柱につかまりました。／水が増えて体が浮いたので、電柱の高い所に登ることができました。目の前に流されてきたビニールハウスが壁となり、水の勢いを止めてくれたのが幸いでした。／3時間ほどすると、松の木が流れてきました。これに座るような形で、電柱のそばで水が引くのを待ちました。寒さで震えが止まりませんでした。それでも眠気に襲われました。「大丈夫か！」と妻たちが声を掛け続けてくれなかったら、生きていられたかどうか。／顎の辺りまで引いた水の中をかき分けて進み、妻がいる民家の2階にたどり着いたのは午後11時ごろでした。」

(後日、佐々木さんが送ってくれた『河北新報』記事コピーより)

Sさんは1.3haでいろんな野菜をつくり、皆で運営する近在の直販市場に出し、また地域のなじみの人たちに振り売りしてきた。今は応急仮設住宅に住んでいるが、耕地の方は、がれきは除去されたが、細かながれき、ヘドロ、塩などは津波にかぶったままの状態である。

これからどうするのか見通しは立たない。ようやく振り売りをしていた地域の人たちのところをあいさつして回ったら、皆さんから「どうだったの、心配していたよ」「ぶじでよかった」と言われ、少し元気になった。

ある専業農家が一部の耕地を自力整備して作付けを始めたが、その他の人は手がつかないままで困っている、と。

事前に電話で聞いた仙台市の復興本部の説明は次のようだった。「農業の場合、現状のまま再建するというわけにもいかないところがあります。今後、農業がどうなるのか、どうするのかという基本的な将来像を検討しないと復興方針は出せないのです」と。

都会的に洗練された、解説的な口調にいささか違和感を覚えた。農業を基本的にどうしていくか見通しが立たないので、復興策が打てない、というようにも聞こえる。しかし、少なくとも都市近郊農業は仙台市にとって必要なはずである。それをどうするのか、そして被災農家をどうするのか、そのような緊迫感は伝わってこなかった。

こういう言葉が出てくる源には、現在の日本農業と農政の問題が凝縮されてあるように思う。政府（とくにこれまでの自民党政府）と農協が丸抱えしてきた農業が、そのままでは立ち行かなくなっていることを、この震災は明白にしているのではないだろうか。

Sさんには、これからこういう見通しでがんばりましょう、ということはいえなかった。心残りをもったまま、Sさんにお礼を言い、みなさんとお別れした。

(続く)